空洞の墓所　　２０１１年１０月２２日　トカラ塾ライブトーク

（稲垣ナオと橋爪太作とが十島村中之島に滞在したのは、２０１１年の９月１３日から２２日にかけてであった。）

十島村には有人島が七つあるが、その中では中之島が中心と目されている。人口も一番多い。村役場の本庁舎は鹿児島市内にあるのだが、支所はここだけにある。島は面積も一番広いし、高度も発達していて、千メートルにならんとする御岳（おたけ）が中心部にデンと控えている。厳寒期の頭頂部は白化粧をするぐらいである。

島内には三つの集落がある。西区と東区、それと日の出地区である。昭和四十年代まではこの他にふたつの集落があった。一家族だけの地や枝村を独立の集落として数えるならば、他に五つあったことになる。西区を除く他の集落は明治三十三年以降に拓かれたものである。

時代を何千年かさかのぼれば、この西区ですらいまだ無人の地であった。縄文土器が発見された地が遠く離れた東海岸に複数あり、現在でもそこは島の大切な神さまが祀られている。昭和の初めころまでは霜月祀りを迎えると、神役たちが一晩泊まりで古代の集落にまつりごとをしに通っていた。何百年か、もしかすると、何千年かの間の毎年の行事であった。現在では、それらの神々は西区集落近くに移され、他の神々とともに合祀されている。

西区は古代集落とは反対に、島の西海岸にあり、集落地は西南に向けて開かれている。その集落は三つの小字に分かれていて、海岸線に沿って建っている数軒の地区はフナグラ（船倉）と名がつけられている。その初めは浜の作業小屋や丸木舟を収蔵する小屋が建っていた。それが、次第に整備されて住居に使われるようになった。

そこから海を背にして急坂を上ると、二股道に出る。右に折れれば里（さと）村へ向かい、左へ折れれば楠木（くしき）に至る。どちらも標高五十メートル以上の高台にあり、眼前に東シナ海の海原が広がっている。

この三つの中では里村が一番の人口密集地である。日本復帰直前の昭和二十七年には五十戸を超えていた。そのころは島内の全集落を合わせると二百三十三戸、人口が千五百である。日本本土復帰をきっかけに、人口の流出が激しくなり、わたしが初めて中之島を訪ねた昭和四十二年、つまり、復帰の十五年後には、六百人近くにまで減っていた。それでも、児童は多かった。全島の小中学校の生徒数が、中学生が五十一名、小学生が百名弱在籍していた。全島民の四人に一人は十五才以下だった。それから五十一年後の西暦二〇一一年の中之島全島の生徒数は小学生が七名、中学生が一名である。人口は一七〇人を下回っている。最も多かった時期の九分の一の人口しかいない。里村の戸数は

十二、ないしは十三にまで減っている。この小字からは未就学児童も就学児童も消えている。

小字内の道路に目を向けると、フナグラには平坦な道が一本だけ走っている。その道は防波堤に沿うようにして、その内陸側に走っていている。他のふたつの小字内の道は、おおかたが坂道で、しかもくねくねとした曲線の道である。その初めは人が通れればこと足りたから、人家の庭先を跨ぐようにして縫っていた。

ところが、昭和の三十年代も押し迫ってから、車が島に入ってきたので、道幅を広げなければならなくなった。軒を接して家並みが続いているので、思うようには広げることができない。それに、家々は斜面の土砂が削り流されないようにと、石垣を積んだ上に屋敷地を確保しているから、削り取れる余分の地面がない。楠木はまだゆとりがあるが、里村は軽自動車がぎりぎりで通れる幅しか広げられなかった。車同士がすれ違うこともできないし、車と人間とが出会っても、どちらかが待避することになる。軒が接するほどに混み合っている光景は、他の島でも似たりよったりである。諏訪之瀬島の集落だけは別格と言えるだろう。明治十年台の後半に、奄美大島の人が開拓した島だからである。それまでの六十余年間は無人であった。活火山の活動が激しくて、家も畑も溶岩流と降灰で全滅したのだった。

里村の道を歩いていると、道に面した家々の多くが空き家であることに気づいた。屋敷の周囲は手入れが行き届いていて、草刈りをした跡も生々しい。庭先に生活用具が散乱しているわけでもない。それでも、無人であることはすぐに分かる。どんなに手入れされていても、時間とともに進行する痛みを覆うことはできない。屋台骨のひとつでも朽ちるなら、あとは崩れるのを待つばかりとなる。柱や梁が折り重なるようにして倒れると、蔓草が全体を覆いつくし、土へ還元を早める。このように、朽ちるというゴールに向かって走り出した家には安定した動きが感じられる。一様に苔むし、一様に古びているからである。

それとは対照的に、人が居住していれば、朽ちかけた戸板であっても、剥がれそうになれば、新しい釘が打ち込まれる。あるいは、朽ちた部分だけでも、別の板と取り替えられる。そうしないと、台風時には被害を大きくする。暮らしがあれば新しい物と古い物とが入り乱れることになり、一様には古びていかない。

空き家の多くは縁者が守っているのであろう。荒れるに任すことを見過ごせないのである。その家が親兄弟の持ち物であれば、なおさらである。家主が帰ってくる当てがなくとも、朽ちて崩れ落ちる姿は見たくないものである。そんな気遣いがこの先何年続けられることだろうか。縁者が高齢となれば、体の自由が効かなくなり、人の家の管理もままならなくなることは分かりきったことである。

その気遣いは墓にも当てはめられる。盆ともなれば、ひとりがいくつもの縁者の墓守をすることになる。島立ての祖の墓やその他、部落の皆で供養しなければならない墓も

ある。そうした墓は島の世話人たち、つまり、総代や神役たちが守りをする。そんな苦労を皆に代わって引き受けるのだから、西隣の臥蛇島では、近隣の島へ出て行った者に「落とし金」とか「手当金」とう名前の負担金を送金させていた。なかには鹿児島市内へ出た者にも課した記録が残っている。

出て行く者は“移住”を自覚していても、島の側では“出稼ぎ”としか見ない。島外で現金収入になる仕事をしている最中に、島ではそうした人たちの墓掃除を無料奉仕でしているのだから、「手当金」を取り立てるのは当然だと考える。その反対給付として、出稼ぎ先で生活に困れば、島から資金援助を惜しまなかった。金利も部落総会で取り決めている。その詳しい決まりは文書として遺されている。ここ中之島ではそうした厳しい規定があるとは聞いていないが、心情には通じるものがある。

空き家にサンドイッチになった家の軒下に、洗濯機が置いてあった。洗濯物も下がっている。締め切ったガラスサッシの中から声が漏れている。それが肉声なのか、あるいはテレビから流れ出ている音声なのかは判然としない。この蒸し暑さのなかで戸を閉めきっているのは、クーラーが使われているからであろう。人影のない庭には塵ひとつ落ちていない。

暮らしのある家の庭先の清潔さは、一見したところ、空き家のそれと変わらない。それなのに、塵ひとつ落ちていない清潔さこそ、わたしを落ち着かなくさせるのだった。朽ち破れかけた戸板を釘で留めてあるのは、丁寧な暮らしをしている証拠であるが、同時に、新しい板を仕入れるとか、山に入って製材するとかの動きは全く感じられない。自分の代で終わることを予期しているのかもしれない。体が動かなくなったなら、都会に出ている子供の元へ移ればいいという消極姿勢がうかがわれる。

育ち盛りの子どもがいれば、三輪車やおもちゃが庭先に散乱しているだろうし、あるいは、父親が子ども部屋を建てる算段をして、材木や木っ端がそこらへんに転がっているはずである。そんな散乱物はいっさいない。一度整理整頓をすれば、大風で枝葉が飛びこんでくるまでは、改めて箒を握る必要もない。この島で、不確定な散乱物が見られるとしたら、東区のほんの一部であろうか。そこには若い所帯の家が何軒かあり、人の流れもある。

歩いていると、汗がシャツに張り付いてくる。台風が接近しているせいか、蒸し暑い。小一時間歩いたが、いまだに人と出会っていない。緩い下り坂にさしかかった。右手が日高本家である。わたしが居たころは岩吉さんという人が当主であった。この庭先で盆踊りをしていたのかと思うと、その賑わいがウソのように思われる。あのころでも過疎化が進んでいて、二十人近くいた中学校の卒業生で、島に残ったのはひとりだけだった。そのひとりというのは日の出地区に住んでいた豊恭秀さんの長女であった。娘ばかりが四人いて、そのひとりひとりに順番で三年間だけ農業の手伝いをしてもらうのだ、と父

親の恭秀さんは語っていた。だから、この長女も三年後には島を離れた。

若者は二十代が数人しかいなかった。それでも、壮年層が元気だったから、各種の行事が端折られることなく行われていた。旧二月の節句の日は年祝いの日であるから、厄年を迎えた人が客を招いて宴をもつ。わたしが在島していたときには、里村と楠木の両方を合わせて、男女十一人の該当者があり、島中の人が祝いに駆けつけた。誰もが十一軒全部を回って祝いの口上を述べるのだが、そのつど角膳に馳走を盛られて振る舞われた。わたしが家々を回って帰宅したのが午前三時であった。あの日の宴は夜明けまで続いたのかも知れない。

道を挟んで、岩吉小父(じい)の家の反対側にシマナカサマの祠がある。腰の高さの石垣に縁取られた神ヤマの天空をガジュマルの枝葉が覆っていた。昼間でも足元が薄暗かったのを覚えている。だが、今日のヤマは明るい。木々の隙間から奥をのぞくと、高さ五十センチほどの木製の祠が見えた。四十余年まえと同じ細工物なのかどうかは判然としない。その背後から明るさが差し込んでいる。目を凝らすと、祠の背後の樹木は切り倒され、道が祠すれすれに走っていた。丸裸にされた聖地と言った感がある。

神ヤマのなかをガジュマルの根がうねりながら四方に延びている。地上に飛び出した根のあちこちに、ビニールの破片が引っかかっていた。屋敷地の清潔さとは対照をなしている。以前は、屋敷が散らかっていても、聖地は掃除が行き届いていた。もしかしたら、ここはすでに聖地ではなくなったのかも知れない。

墓地に行ってみる。集落の一番高いところにあるから、急な坂を上らなければならなかった。坂の左手に白木家が建っていたが、ここも空き家になっていた。当主の白木和美さんは三年前に他界している。島では最も古い家系のひとつで、島の東海岸にある古代住居跡地である白木（地名）の社を祀る役を受け持ってきたのだが、そんな歴史も終わった。一説には、シラキはシラギに通じていて、古代に新羅人が潮流に乗って渡ってきたとも言われている。いまでも、多くの漂流物が朝鮮半島から流れ着くのだから、半島南部に居た新羅人が渡ってきても少しも不思議ではない。

坂道は短いから、息を切らすこともなかったが、どん詰まりの地に墓所があるのだな、という感を強くした。後背地は崖になっている。入り口の方を見上げると、仁王像が迎えてくれた。阿吽の像のようだ。高さが一メートルあるかないかの像が、三メートル幅の入り口の両側に据えてある。山川石に彫ってあるのだが、風雪に耐えかねて大方は溶けている。左の像は首が飛んでいるので、気をつけてみないと、像であることを見落としてしまう。

この像は内地で仕入れて帰ったのだろうか。像を彫れる石工が島にいたとは思えない。溶け具合から憶測すると、二百年や三百年は経っているであろう。そうだとすると、像は異国船がこの海域に出没した幕末期には座っていたことになる。これは村の南端に位置している宝島でのことであるが、燃料の薪や食料を求めて島に上陸してきたイギリス

人もいた。宝島には島津の城下から派遣されていた在番が詰めていて、その指揮下で銃撃戦となり、ひとりの船員を撃ち殺している。そんな一件が江戸表に報告されて、「外国船打ち払い令」が施行される契機となった。さらには、それよりも一世紀まえに島を襲った海賊の首魁・東与助の乱暴も、この像は見届けていたかもしれない。

像は帆掛けて走る島の交易船、皆は年貢船の名前で呼び続けていたのだが、明神丸と命名された年貢船に運ばれてきたものと思える。年貢船は明治四十年まで就航していて、終わり近くになったころは十三反帆の大型船になっていた。いまから九十四年前までである。

坂を上りきり、狭い平坦地に立つ。眼前に広がっている光景に、「これが墓場か」と唖然とした。現在祀られているのは五基だけであるとは聞いていたが、その荒涼たる様はとても墓所とはおもえない。改葬に継ぐ改葬で、墓は掘り返されている。現在島に居住している人でさえ、墓を他所に移している。多くが鹿児島市内か、その周縁部である。子どもたちの移住先近くに新たに墓地を購入したのである。

不要になった墓石は戒名を刻んだ上部の石だけを倒してあるものもあれば、根元から引き抜いて、隅に重ねて始末してあるものもある。重ねるだけでは改葬者の気持ちの整理がつかなかったのか、細かく割り崩して撤去してある墓もあった。土手の下で土を被った石があったので、気まぐれに掘り起こしてみたら、明治五年に他界した女性の墓であった。「日高」の文字が読み取れた。

昭和四十二年のころは、墓参する人影が絶えたことがなかった。墓石がいつの時代から建てられるようになったのかははっきりしないが、そう古い話ではない。墓石の入手も難しかったし、それに、島の墓は土まんじゅうのように、盛り土をした墓が一般であった。古い年号を刻んだ墓は遠島人や島津の役人のものと思える。

昭和十五年にアチック・ミュージアム（渋沢敬三主宰）の一行が撮った墓場の写真があるが、その現場は里村のものと思える。その像から推測すると、墓石はそうとうな数になる。三十基や四十基ではきかない。広くはない墓所全体が供え花で埋まっている印象がある。

どの墓も旧暦の朔日と十五日、それと月末は必ず榊が新たに立てられ、線香が焚かれる。盆ともなると、朝となく昼となく人が行きかっていた。それが、いまでは盆の墓参も不要となり、盆行事に欠かせなかった踊りや歌までもが廃棄されてしまった。

いま、人間ブルドーザーが掘り起こした墓場には、魂の抜け殻が累々としている。残る五基ですら、いつ改葬されるか分からない。隣の楠木の墓場にいたっては二基を残すのみとなった。いま、人が百人以上住んでいて、千五百トンの定期船が週に二回の割合で、鹿児島市から通ってきて、郵便局があって、お巡りさんが常駐していて、学校があって、若い先生も赴任してきて、工事関係者も出入りしていて・・・・・と他所と変わりない島である。が、先祖の知恵を次代に伝える術を奪われてしまった島でもある。